
夢の放物線

御影永遠

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の放物線

【Nコード】

N8883C

【作者名】

御影永遠

【あらすじ】

走り幅跳びに情熱を注ぐ翔太に、無常にも引退勧告が突きつけられる。ジャーナリストを目指す恋人、恵理に打ち明けるが、恵理は泣きながら去ってしまう。現役最後の大会で、翔太は奇跡を起こせるのか。恵理はその姿を見届けるのか。あの日の約束を胸に、翔太は走り出す。ロングジャンプを題材にした短編です。

（前書き）

走り幅跳びの知識が薄いので、詳しくない方でも読んで頂けると
思います。逆に、詳しい方には物足りないかもしれませんが、ご容赦
下さい。

遠い夏の日の記憶。

炎天下のグラウンドは、夕方だというのに容赦なく降り注ぐ太陽の熱を反射しながら、ユラユラと揺れていた。

合間なく鳴き続けるセミの群れ。

見上げると、大きな入道雲が大空から見下ろしていた。

こめかみ辺りから流れ出る汗を、シャツの袖で拭った。

遠くで彼は右手を上げた。

オレンジのランニングシャツと短パン。

その右手が降りた時、これから何が始まるのかドキドキした。

彼は風を切りながら、もの凄いスピードで走ってくる。

まるで川原土手から見る電車のように、前を向いて一直線に走ってくる。

加速するスピードに比例するように、僕の心臓もどんどん高鳴る。

次の瞬間、彼は力強く大地を蹴った。

その体は、重力に逆らいながら大空に舞い上がった。

目の前を飛んでいくオレンジが、一瞬だけ僕に降り注いでいた光を遮り、僕は彼の影に包まれる。

その美しい放物線は、ずっと遠くの砂地に降り立った。

彼は足についた砂を払いながら、僕にっこりと微笑む。

体の底から込み上げる興奮で、僕は言葉もなく彼を見つめる。

僕も飛びたい。

その時、押さえられない欲求が芽生えた。

杉野翔太が走り幅跳びを始めたのは、小学四年生の頃からだった。以来、中、高と陸上部に在籍し、高校のインターハイでは二位に入った。

大学に進学しても陸上を続けた。

選手権で入賞した事をきっかけに、陸上部のある中堅の建設会社にも就職できた。

大手の実業団のように、陸上だけをしていれば良いという訳ではなかったが、コーチや専門のスタッフを抱え、充実した毎日を過ごす事ができていた。

そんな順風満帆な人生も、入社二年目に悪夢が待っていた。

練習中に、ハムストリング筋断裂を起こし、半年間のリハビリ生活を余儀なくされた。

その他にも、半月版損傷や足首の疲労骨折など、翔太の体は長年の選手生活でボロボロになっていた。

それでも二十七の歳まで陸上に情熱を注いできた。

実業団の大会でもそこその成績を収め、アジア大会に選抜された事もあった。

しかし、二十七という年齢は、翔太の競技者としての限界を噂するには充分な年月だった。

翔太は午前中の業務を終え、いつものようにグラウンドにいた。

念入りにストレッチを行い、ランニングを始めようとした時、コーチに声を掛けられた。

「翔太、ちよつと良いか？」

翔太はトラックから出ると、コーチに着いて行った。

走り幅跳びのフィールドはトラックの横、グラウンドの右端にある。コーチは砂場の横に立った。

「翔太。お前のベストは？」

「七メートル七十一センチです」

翔太もコーチの横に立った。

「ここ三年では？」

「……去年の大会の七メートル四十センチです」

コーチは八メートルのライン上に立っていた。

「なあ翔太。世界では九メートルに届こうかとしている。世界と戦う為には八メートルにどれだけ近づけるかが重要だ」

コーチは空を見上げた。

「もう充分頑張ったんじゃないか？」

選手生活にピリオドを打ち、トラックを去っていった選手をたくさん見てきた。

自分がいつか引退しなければならない事もわかっていた。

しかし、その時はもつと先だと思っていた。

自分はまだ跳べる。

翔太はそう信じていた。

突然の引退勧告に、翔太は言葉を失った。

「選手を引退しても、会社に残る事はできる。これからの事を考えたら、決断は早い方が良い」

コーチが翔太の肩に手を掛けた。

「でも、まだ跳べます！」

翔太は懇願した。

しかし、コーチは翔太の顔を見る事はなかった。

「上はそう思っていない。このまま陸上を続けたいのなら、ここにはいられなくなるぞ」

コーチの声から、翔太への評価が厳しい事は明白だった。

「会社も厳しい状況が続いている。陸上部の予算も年々抑えられてきているしな」

コーチは翔太に背を向け、うなだれた声で言った。

「本当にすまない。わかってくれ」

コーチはそのままトラックの方へと歩を進めた。

残された翔太は俯いた。

悔しだけが体中を駆け巡り、拳はトレーニングパンツを握り締めたまま固まっていた。

「取材に行ってきます」

松本恵理は一眼レフのデジタルカメラを肩に掛け、慌しくオフィスを出た。

恵理がスポーツジャーナリストを目指すようになったきっかけは、子供の時にテレビで見たオリンピックだった。

元々スポーツが好きで、高校まではハードルの選手だった。

しかし成績はぱつとせず、大学に進学してからは陸上を諦めた。

翔太と出会ったのは、高校の陸上部仲間に誘われて、大学のグラウンドに見学に行った時だった。

当時の翔太は逸材と言われていて、周囲からの期待も高かった。

そんな先入観もあって、初めてコンパで話すまでは、英雄気取りの嫌な奴だと思い込んでいた。

しかし、いざ話してみると普通に普通で、周囲からちやほやされている事は全く感じられなかった。

逆に、競技への熱い思いを延々と語る、ただの陸上バカに感じた。

オリンピックで見た世界最高のアスリートたちに話が及ぶと、恵理も一緒になって語り合った。

意気投合した二人は次第に惹かれ合い、自然と付き合うようになった。

あれから九年、喧嘩も沢山したけど、今でもその思いは変わってはいなかった。

恵理には夢があった。

いつの日か、オリンピックの取材を任されるようなジャーナリストになって、あの感動と興奮を日本中に伝えたいという夢を。

そしてそのオリンピックで、翔太が跳ぶ姿を見たい。

しかし現実は一筋、月間の陸上専門誌の小さな記事を扱うのが精一杯だった。

その日も、高校生の地区大会の取材だった。

学校を訪れ、有力選手や監督のコメントを取り、練習風景をカメラに収めると、時刻は既に十九時を回っていた。

「はあ、嫌になっちゃう」

「お疲れ様です」

オフィスには数人のスタッフが残っていた。

「大分お疲れですね」

一人がインスタントコーヒーの入ったカップを差し出した。

「昨日も徹夜したのに、今日中に上げろって言うんだよ」

恵理は写真の入った茶封筒をデスクに投げやると、自席でパソコンに向かう編集長に向かって、気付かれないように舌を出した。

「あの鬼め！」

その様子を見ていたスタッフは苦笑いした。

「しょうがないですよ。先月号の売り上げ、相当酷かったらしいですから」

「そうなの？」

「局長にかなり絞られたって話ですよ」

「ふーん。良い気味よ」

編集長を横目で見ると、カップに口を付けた。

「でも、僕たちもつかつかしてられませんかよ。廃刊なんて事になったら、最初に首切られるのは僕たちですから」

「わかってる。だからこうして働いてるんですよ？」

恵理は壁に掛けられた鏡を覗き込み、目じりを指できゅっと上げた。

「はあ、このまま老け込んだら労災で訴えてやるんだから」

「最近デートしてないんじゃないですか？」

女子社員が後から覗き込んできた。

「そんな時間がどこにある訳？」

「その内、女じゃなくなっちゃいますよ」

「イーだ！」

恵理は鏡越しに顔をしかめた。

「あつ、その顔可愛い」

女子社員も真似して顔をしかめた。

そんな日々の繰り返しにも、それなりの充実感があった。

けれども、同級生の披露宴の招待状や、出産の噂を耳にする度に、恵理の心も揺れていた。

（私も二十七だもんなあ。そろそろ結婚も考えなきゃいけないのか

な)

両親からは、まだかまだかと言われていた。都会では初婚が三十過ぎなんてざらだと言っても、田舎の両親には全く通じない。

見合い写真を送ってきた事もあった。

姉が二十三歳で結婚し、既に二児の母である事も両親の焦りを招いているのだろう。

(翔太はどう思ってる訳?)

携帯電話の待ち受け画面には、ただ笑っている翔太がいた。

その横で笑っている自分に向かって、心の中で呟いた。

(あんたはどうしたいの?)

長かった梅雨も明け、初夏の訪れを告げるように、きらきらと輝く日差しがグラウンドの芝生に降り注いでいた。

翔太に残された時間は、あと一カ月だけ。

一カ月後に行われる大会を最後に、翔太は陸上部から除名される。

退社して、他の会社で陸上を続ける事も考えた。

しかし、大きな実績を持たない翔太に、手を上げてくれる会社はないだろう。

そして二十七という年齢も、競技者人生の再出発にはハードルとなる。

だからと言って、会社に残っても良い事は少ない。

同期の連中は翔太が練習している合間にも仕事をこなし、実績を上げた者から昇進していった。

既に役職を持っている者もいる。

そんな中、平社員で大した仕事もなかった翔太にとって、サラリーマンとして働くには大きな格差がある。

しかし、転職した所で手に職を持っている訳でもないので、結局はゼロからのスタートになる。

大学の時に取った教員免許も、少子化のご時世では効力を発揮する

とは思えない。

色々悩んだ結果、翔太は会社に残る事を決めた。帰りにふと立ち寄った本屋で、ビジネスマンのHow to本を手にした。

表紙にはスーツ姿の男性が躍動的に歩く姿が載っていた。

（これが十八年の結果か）

走り幅跳びを始めて十八年、それまでの練習が何だったのか、翔太にはわからなくなった。

翔太はいつものバスに乗らず、大通りからタクシーを捕まえた。

今日は恵理に話すと決めていた。

そんな事とは知らず、恵理は久しぶりのデートの為に、必死に原稿を書いていた。

「やっと上がったー」

恵理は編集長からOKをもらった最終稿を担当に渡し、大きく伸びをした。

壁に掛けられた時計に目をやると、十九時を回っていた。

「お先」

周りのスタッフに声を掛け、愛用のショルダーバッグを手にとってエレベーターに飛び乗った。

最後に翔太とデートしたのは、まだ桜の季節だった気がする。

春から夏に掛けては、例年の事だが忙しくなる。

インターハイやら高校野球やらで学生スポーツが盛り上がり、小さな取材が立て込んでくるからだ。

しかも学生相手なので、日中や夜の取材ができない為、夕方に取材して社に戻り、そのまま夜まで原稿をまとめる毎日だ。

次の日になれば次の取材が待っているのです、結局帰るのは深夜に近くなる。

電車に飛び乗ると、帰宅途中のサラリーマンやOLで満員だった。

自転車通勤の恵理には無縁の世界だ。

梅雨明けしたというのに、車内はむしむしと熱気がこもり、慣れな

いせいもあつて耐え難い不快感が襲ってきた。

（何か面倒になってきた）

久しぶりに会う約束をしたというのに、恵理は今すぐにも降りた気分だった。

ようやく目的の駅に着くと、扉が開くのももどかしく感じた。

ホームで新鮮な空気を思いっきり吸い込んでから改札へ向かった。

腕時計を見ると、約束の時間の二分前だった。

改札を抜けると、目の前にオブジェがある。

周りには待ち合わせをしているだろう人影が数人あった。

その中に翔太の姿を見つけ、恵理は小走りに駆け寄った。

「久しぶりだね」

車内で思った事も忘れ、翔太の顔を見ると少し嬉しくなった。

「仕事、大丈夫だった？」

「平気。それよりもお腹すいた」

二人は近くの洋食レストランに入った。

ここのハンバーグを食べた次の大会で、翔太は三位入賞を果たした、云わば縁起の良い店だ。

お互いが住んでいる場所の、丁度中間点に当たる駅という事もあって、待ち合わせによく使う場所でもある。

料理の前にワインで乾杯した。

翔太はアルコールをほとんど飲まないが、ワインだけは唯一飲める酒だった。

前菜代わりに頼んだ料理をつまみながら、翔太はグラスのワインを飲み干した。

恵理はその様子を見て、何かあると感じていた。

「どうかした？」

「うん。ちよつと話があつて」

そこまで言うと黙り込んでしまった翔太に、恵理は少し緊張した。（もしかして、話って…プロポーズ！）

恵理も黙ったまま、翔太の一言目を待った。

「あのさ、実は」

言い淀む翔太に、もどかしさを感じていた。

「その、ロンジャン辞めようと思って」

「えっ？」

想像していた言葉と全く違う一言に、恵理は思わず固まった。

「引退しようと思ってさ」

そう言って目を伏せる翔太に、恵理は驚きを隠せなかった。

「何で？どうしてそうなるの？」

「俺も二十七だしさ。会社から仕事に専念しろって言われて、そうした方が良いかなあと思って」

「まだこれからじゃない。三十歳がアスリートの一番良い時でしょ？」

「一流の選手はそうかもしれないけど、俺にはこれ以上無理だよ」
恵理は言葉を失った。

あんなにロングジャンプに全てを掛けていた翔太が、まさか引退するなんて言い出すとは思ってもいなかったから。

二人の間に沈黙が訪れ、恵理は呆然としていた。

「それに、恵理との事も考えなきゃいけないしさ」

かろうじて聞き取れるほどの小さな声を、恵理は聞き逃さなかった。
「どういう意味？」

翔太はテーブルのいたる所に目を移しながら、声を振り絞るように言った。

「だから、結婚の事とか」

陸上の事になると饒舌な翔太だが、肝心な話になるとからっきしになる。

翔太は恵理の様子を覗くように、そつと顔を上げた。

恵理の視線は真っ直ぐに翔太を捉えていた。

その瞳は少し潤んでいた。

「私のせい？」

翔太はその言葉の意味がわからなかった。

「私のせいでロンジャン辞めるの？」

恵理は瞬きも忘れて翔太を見詰めていた。

「そういう訳じゃないよ。会社から辞めろって言われたから、そろそろ良い頃かなって思っただけで」

「何それ」

恵理は必死に涙を堪えていたが、ついにその瞳から一筋の涙がこぼれ落ちた。

「だから諦めるの？だから私と結婚するの？そんなのおかしいよ」

翔太は慌てて弁解した。

「違うよ。恵理とは結婚したいってずっと思ってた。だから…」

「結婚なんてどうでも良い！」

翔太が言い終わるのを待たずに、恵理は声を荒げた。

周囲にいた客が、恵理の声に驚いて振り向いた。

そんな事にも気付かず、溢れてくる涙を拭いもせずに、恵理は翔太の目を見詰めた。

「そんな事は良いの。本当に引退するつもりなのかを知りたいの」

翔太は恵理の気迫に押され、思わず顔を逸らした。

「俺だつて辞めたくないけど、しょうがないよ」

その言葉を聞いて、恵理は顔を伏せた。

テーブルに恵理の涙がこぼれた。

「そう」

震える声を振り絞ると、恵理は席を立った。

そのまま立ち去ろうとした瞬間、恵理は振り返った。

「翔太」

翔太が恵理を見ると、見た事のない程の悲しい顔があった。

「翔太は何の為に跳んできたの？」

そう言い残し、恵理は外へと飛び出して行った。

翔太はピットに立っていた。

走り幅跳びの助走路をピットと呼ぶ。

その先に踏切板があり、選手が降り立つ砂場が広がっている。
今まで何千回、何万回と見た風景。

ボロボロになるまで走り続けた、翔太の花道だ。

1センチでも遠くへ跳ぶ為に、必死で練習してきた。

翔太の心の中で、恵理の言葉が何度も繰り返されていた。

（何の為に跳んできたの？）

あの日の悲しそうな顔が浮かんでくる。

しかしその顔は、照りつける日差しにかき消されるように消えた。

翔太は一瞬目を閉じると、たどり着くべき場所を見据えて走り出した。

踏切板の手前で力強く蹴り跳ぶと、翔太の体は弾き飛ばされたビー玉のように、美しい放物線を描いていった。

恵理は慌しい生活の中で、やりきれない思いと戦っていた。

翔太が結婚を口にした事は嬉しかった。

例えば何が理由でも、そうなる事を望んでいたはずだった。

それなのに、素直に受け入れる事ができずにいた。

それだけではない。

それ以上に、心が晴れない何かがあった。

いつもなら山のように膨れ上がる仕事に忙殺され、個人的な事は忘れて仕事に打ち込めるのに、何をしても身が入らない日々が続いていた。

「恵理さん、今日は帰った方が良いんじゃないですか？」

その日も恵理らしからぬミスをしてしまい、印刷所に迷惑を掛けてしまっていた。

「編集長も気にしましたよ。疲れてるんじゃないかって」

スタッフの問い掛けにも、気のない返事を繰り返すばかりだった。

「松本、二、三日ゆっくりしてこい」

編集長の気遣いで、恵理は休みを取った。

しかし、家にも気が抜けたように横になっているだけだった。

（私はどうすれば良いの？）

答えの出ない自問を繰り返すばかりで、時間は瞬く間に過ぎていった。

三日目にやっと行動を起こした。

翔太が本当に引退するつもりなのかを確かめる為、友人に電話を掛けた。

翔太と同じ会社の女の子で、陸上部のスタッフも兼ねている。

「もしもし、松本ですけど」

翔太が引退するなんて信じられない。

その気持ちを正直に伝えた。

「それが、会社が辞めろって。酷い話ですよ」

翔太も同じような事を言っていた。

「杉野さんも大分苦しんだんだと思います。だからあんな事になって」

「あんな事って？」

「えっ？聞いてないんですか？」

友人の言葉に、恵理は呆然とした。

練習中に肉離れを起こし、そのまま病院に担ぎ込まれていた。

以前に断裂した箇所と同じらしく、無理な練習が祟ったのだろうという話だった。

「それなのに、おとといから練習再開しちゃって。幸い大事には至らなかったみたいですけど、ドクターからも反対されてるみたいなの」

その言葉に、更なる衝撃が走った。

肉離れといっても筋肉組織の損傷だ。

軽度だとしても、数日で練習を再開する事が危険だという事は、スポーツジャーナリストを目指す恵理にとっては容易に想像できた。

「でも、誰が止めてもダメなんです。これが最後のチャンスなんだからって」

肉離れは機能的な問題だけではなく、かなりの激痛が伴う。

特に走り幅跳びの場合は、跳躍時に跳ぶ方の足に急激な負荷がかか

る。

軽く跳んだだけでも相当な痛みが走るはずだ。

恵理は受話器の口を手で押さえた。

嗚咽が込み上げてくる。

落ち着こうと深呼吸を繰り返し、涙を拭った。

友人に礼を言って受話器を置いた。

バッグからスケジュール帳を取り出して開いた。

社会人競技会が来週の日曜に予定されていた。

恵理は携帯電話を握り、もう一度深呼吸した。

「もしもし」

七回目の電話でやっと翔太が出た。

「肉離れしたって本当？」

突然の質問に、翔太は少し驚いた。

「誰に聞いたの？大丈夫だよ。古傷みたいなものだから」

「それなのに練習してるの？」

「だから大丈夫だって」

恵理は黙り込んだ。

翔太も何も言わなかった。

少しの沈黙の後、恵理は大きく息を吸い込んで呟いた。

「もう止めて」

翔太は応えなかった。

「お願いだから」

恵理は震える声を隠そうと、その一言が精一杯だった。

「来週の日曜、見に来てくれよな」

翔太の応えは、恵理の期待しているものではなかった。

「お願いだから止めて」

「ジャーナリストだろ？取材だよ、取材」

「止めて」

「まあ個人的な応援も大歓迎だけどね」

「止めて！」

抑えきれなくなった感情が噴出し、恵理は涙声で叫んだ。

「どうして？もう辞めるんでしょ？だったら頑張らなくて良いじゃない！」

翔太は何も応えなかった。

「お願い。お願いだから…もう止めて」

涙ながらの懇願に、翔太は呟いた。

「待つてるから」

切れた携帯電話を片手に、恵理は膝から崩れ落ちた。

不安だけが広がり、声を上げて泣いた。

恵理は時計を見た。

あと一時間で競技会が始まる。

走り幅跳びの予選は十三時からだ。

ベッドに寝転がったまま、天井を見詰めた。

競技場には行かないと決めていた。

これが二人にとっての別れになるとしても。

男というものが自分勝手な生き物だという事はわかっている。

格好付けて、勝手に決めて、それが愛情だと勘違いする事も。

引退するのも、怪我を押して競技会に出るのも、翔太が一人で決めた事だ。

一緒に歩いてきた時間が何だったのか、恵理には何もかもがわからなくなっていた。

自分には何も相談してくれない、何も変える事ができない。

そんな悲しみは、簡単に拭えるものではなかった。

（最後まで好きにすれば良いわ。気の済むように）

恵理は再び時計を見ると、ブラケットを頭から被った。

前日の雨の影響もなく、競技場には青空が広がった。

その日の翔太は絶好調だった。

予選も一発でクリアし、最低限の負担で決勝に駒を進めた。

しかし、一回のジャンプで右足の痛みは確実に強くなっていた。
(大丈夫。あと五回なら跳べる)

翔太には自信があった。

記録が伸びなくなった原因に気付いたからだ。

高校や大学の時は、がむしやりに跳んでいた。

しかし、少し名が通り始めると、跳躍のフォームや理想の空中姿勢を意識するようになった。

結果、確かに自己ベストを出す事ができた。

しかし、理想を追い求めるあまり、自分の本来の跳躍を見失った。
ただ空を飛びたい。

それが自分の原点だったはずなのに。

その事を思い出した時、翔太は跳ぶ事の喜びを思い出していた。

ただ夢中に跳んでいたあの頃、昨日の自分より少しでも高く、さっきの自分より少しでも遠くへとあがいていたあの頃を。

決勝に進んだ選手は十二名。

翔太はシーズンベストの七メートル五十八センチを跳んで、全体の二番目の記録を出した。

記録の低い順に飛ぶので、翔太は十一番目の跳躍になる。

翔太はスタンドに目をやった。

スタンドは半分ほどが埋まっていた。

ほとんどが会社の応援団や家族だった。

トラックで走る同僚や恋人に声を掛け、手を振りながら応援していた。

その中に恵理がいなかったかを探した。

しかし、恵理の姿はどこにもなかった。

来てくれないかもしれないと、自分でも思っていた。

それでも後悔はなかった。

ここに立っているのは、恵理の為ではない。

自分の為だ。

自分の夢の為なのだから。

競技は進み、照明が灯されていた。

四回のジャンプを終え、翔太は二位に付けていた。一位との差は六センチ。

しかし、翔太の右足は限界が近付いていた。

ピットの脇にある選手の待機場所に座り、タオルを頭から被って集中力を高めようとしている最中も、右の太もも裏に広がる痛みに耐えていた。

（頼むから持ち堪えてくれ！）

翔太は神に祈る思いだった。

しかし、痛みは徐々に広がり、翔太の心を不安が蝕んでいった。

そんな時、翔太は走り幅跳びを始めた頃の事を思い出した。走り幅跳びを始めたきっかけを作ってくれた従兄弟の言葉。

「翔太。ジャンプ好きか？」

うん。

「どうして翔太もジャンプ始めたんだ？」

お兄ちゃんみたいに空を飛びたいんだ。

「俺はある人のお陰で続けてこれたんだ。俺に教えてくれたんだよ何を？」

「空を飛ぶ為の秘密」

僕にも教えて。

「翔太は跳ぶ時に何を考えてる？」

遠くに跳びたいって。

「何で遠くに跳びたいんだ？」

遠くに跳べれば、嬉しくなるから。

「何で嬉しくなるんだ？」

みんなが褒めてくれるから。

「翔太は褒めてもらう為に跳んでるのか？」

わかんない。

「俺はワクワクするんだ」

どうして？

「昨日の自分が知らなかった場所に行ける気がするんだ」
わかんない。

「翔太にもいつかわかるさ。ワクワクしたら、もっと高く、遠くに
跳べる」

お兄ちゃんみたいに？

「ああ。跳べるさ」

彼はそう言つて、翔太の頭を優しく撫でた。

その半年後、誰も知らない天国へと飛び立って行った。

あの時はわからなかった秘密。

でも、今ならわかる。

昨日の自分が知らなかった場所へ。

あの時の約束を思い出した今なら。

翔太は右足にそつと触れて祈った。

（お兄ちゃん。力を貸して）

出番が近づくに連れ、翔太のボルテージも上がっていった。

軽い準備運動でも右太ももの痛みを感じていたが、集中力を研ぎ澄
まし、跳ぶ事だけ意識するようにしていた。

自然と観客の声も聞こえなくなっていた。

十番目のジャンパーが競技を終え、係員に促された。

翔太は大きく息を吐き、ピットへと足を進めた。

その時、一切の雑音を排除していた耳が、聞き覚えのある声を捉え
た。

「翔太！」

翔太はとっさにスタンドを見た。

スタンドの入り口に、恵理の姿があった。

恵理は息を切らしながら、真っ直ぐに翔太を見ていた。

そして、ただひたすら翔太の名前を叫んでいた。

「翔太！翔太！翔太あああ」

翔太の右足が限界に来ている事は、歩く姿から容易にわかった。

頑張つてとも、もう止めてとも言えない恵理は、泣きながら翔太の名前を叫び続けた。

翔太はピットに入り、大きく深呼吸した。

そして、左手の人差し指を立てると、腕を大きく伸ばして、太陽の沈みかけた西の空を指差した。

それはあの日の約束。

恵理が陸上を諦め、夢の舞台を諦めた事を話した時、翔太が恵理に言った言葉。

「俺がオリンピックに連れてってやる」

忘れていた約束を思い出した今、翔太には跳ぶ事の意味がはつきりとわかる。

何故遠くに跳びたいのか、その先に何が待っているのかも。

全ては二人の夢の為。

一緒に追いかけた夢を果たす為。

恵理は号泣しながら崩れ落ちた。

周囲の人たちが驚き、恵理に駆け寄ったが、両手で顔を押しさえたまま立ち上がれなかった。

（オリンピックなんてどうでも良い。翔太が無事ならそれで）

恵理の心の叫びは、走り出した翔太には届かなかった。

まるで何かに吸い込まれていくかのように、翔太の体はどんどん加速していった。

踏切板ぎりぎりで踏み込んだ右足は、体を大きく空に弾き飛ばした。風の階段を駆け上がり、空をかき分ける両手を未知の崖にしがみつくように前へ伸ばした。

無理やり前方へ伸ばした上体のバランスが崩れ、翔太は着地の瞬間に左に傾いて転がった。

最後の跳躍。

とても美しいとは言えない跳躍。

でも、これが二人の思いを乗せた、翔太にとって最高の跳躍。

翔太は一点を見つめて走り出した。
前へ、ひたすら前へ。

恵理の呼ぶ声も、スタンドの応援も聞こえない。
行ける。

あの光の向こうへ。

翔太の瞳の先には、白く輝く光の渦が見えていた。
踏切板も見ずに、光り輝く場所だけを見詰めて走った。
そして跳んだ。

限界のはずの右足は、温かい何かに包まれていた。
知っている感触。

長年を共に歩き、いつも寄り添っていてくれたあの温もり。
(恵理…)

翔太はその温もりに押されるように舞い上がった。
幾度となく繰り返し返した練習から、自然と足が宙を蹴った。
上体を前に持つていく為に右手を伸ばした。
その瞬間だった。

翔太の右手に白い光の羽が集まり、空へと引つ張られた。

「翔太。ジャンプ好きか？」

光の羽から懐かしい声が聞こえた。

「大好きだよ」

「どうして翔太もジャンプを始めたんだ？」

「大切な人と夢を叶える為だよ」

「お前なら飛べるさ」

「うん。飛べる」

光の羽が弾け飛ぶ時、翔太の頭を優しく撫でた。
描かれた放物線は砂場に降り立った。

翔太は体を起こし、係員が測定している着地点を見た。
そのまま膝を落とし、俯きながら両手で小さく拳を握った。
「うおおおおおおお！」

翔太の雄叫びが薄暗くなつた天を貫いた。

その声を聞き、恵理は顔を覆っていた両手を下ろした。

翔太は両手を広げ、空に向かって吠えていた。

ピット脇に設置されていた掲示板に翔太の記録が出ると、スタンドから大歓声が上がった。

「翔太！」

翔太の目からは止めどなく涙が溢れていた。

両脇にいた人に抱えられるように立ち上がると、スタンドの一番前まで走り寄った。

恵理は何も声を掛けられなかった。

ただ翔太と同じように、止めどもない涙が頬を濡らした。

二人に送られる歓声と拍手は、いつまでも競技場に響き渡っていた。

「ほら、もうすぐパパが帰ってくるんだから！」

母親の手を逃れようと、リビングを無邪気に走り回っていた。

「もう、本当にすばしっこいんだから」

やれやれといった感じで、恵理は両手を腰に置いた。

「パパが帰ってきたら、うんとお仕置きしてもらうんだからね！」

その言葉に驚き、男の子は慌てて母親の元へ戻ってくる。

甘えるように恵理の足元にしがみつくと、恵理は優しく抱きかかえた。

「あつ、もうこんな時間！」

恵理は男の子を抱きかかえたまま、ソファアーの上のバッグを肩に掛けた。

「あれ？」

バッグの中に車のキーが見当たらなかった。

「翔偉斗。また鍵隠したでしょ」

男の子は笑いながらサイドボードを指差した。

「こんな所、どうして手が届く訳？」

呆れながらサイドボードの上に置かれたキーを掴んだ。

斜めになった写真立てを正面に戻すと、慌てて玄関へと向かった。

穏やかな午後の日差しがリビングを照らしていた。

淡い春の光に、写真立ての銀色のフレームがきらめいていた。

胸に日の丸を付けて笑っている翔太の腕には、優しく微笑んでいる
恵理の手が、そっと添えられていた。

（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。私自身は体力測定などでしか経験がありませんが、ロングジャンプの「より遠くへ跳びたい」という思いを、私なりに表現してみたつもりです。宜しかったら感想をお聞かせ頂きたく、宜しくお願い致します。（酷評でも構いませんので）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8883c/>

夢の放物線

2010年10月28日06時19分発行